



愛のごとく(上)

渡辺 淳一

新潮文庫

あ
愛



新潮文庫



昭和六十二年十月二十五日 発行
平成元年十一月十五日 十三刷

著 者 渡 辺 淳 一

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四〇

振替東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

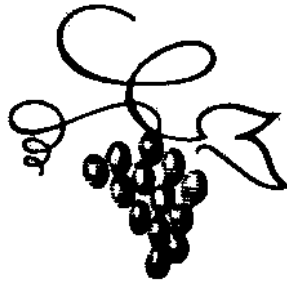
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

愛 の ご と く

上 卷

渡 辺 淳 一 著



新 潮 社 版

3928

愛
の
ご
と
く
上
卷

因^{いん}果^が→ 模^も糊^こ不^ふ清^{せい}

夢のなかでサイレンの音を聞いたような気がして、風野^{かぜの}は目を覚めました。だが目覚めてみると夢のなかみはおぼろげで、サイレンの音だけが遠く近くきこえてくる。風野はカーテンでおおわれているベランダのほうを見、その端が白んでいるのをたしかめてから枕元^{まくらもと}の置時計を見た。

五時を十分ほど過ぎている。

枕元には明りの消えた電気スタンドがあり、横には衾子^{えりこ}が軽くうつ伏せの形で眠っている。風野はその平たい肩口を見ながら、またサイレンの音に耳を澄ました。高く低く、波打つところをみると、やはりバトカーの音ではなく火事のようなのである。

どのあたりなのか、ベランダの先のようにも、もっと右手の方角のようでもある。朝火事といってもまだ五時である。朝の食事のために火をつかったのか、それとも昨夜の

火の不始末なのか、あるいは漏電でもしたのだろうか。考えるうちに、風野は自然に家のことを思った。

昨日、家を出てきたのは午後一時だった。新宿に出て、社史の編纂を依頼されている保険会社の資料室に行き、そのあと編集者に会って飲み、衿子の家に着いたのは十一時過ぎだった。

夕方までの資料室にいた時間はともかく、そのあとは家から風野に連絡をつける方法はない。

衿子の棲んでいるところを、風野は妻にいつていないが、矢嶋衿子という女と際き合っていることだけは、知っているはずである。妻は衿子の住所も電話番号もきかないし、たとえば、妻がこちらの居場所を知らないことに、安堵しながら、反面、不安になることがないわけでもない。

風野のように、まだものを書き始めて日の浅い男には、いつどこから原稿の依頼がくるかわからない。そんなとき、不在ばかりに、せっかくのチャンスを失うことになるかもしれない。

これまで風野は親しい編集者にだけ、衿子の部屋の電話番号を教えようかと思いつながら、それも身勝手すぎるような気がしてやめていた。

ともかくこのままでは、家でなにか大事でもおきたら、向こうから連絡のしようがない。大事がそうそうおこるわけもないと思ひながら、衾子の家に泊るたびに軽い不安を覚える。いまのサイレンの音も、まさかと思ひながら、家のことが心配になる。

このごろ、風野は朝早く目覚めることが多くなつた。

前夜、二時、三時まで仕事をしていても、六時か七時に、ふっと目覚めることがある。

もつとも目覚めたからといって、そのまま起きるわけでもない。しばらく床のなかでとりとめもないことを考えて、またいつのまにか眠る。

おかげで、二度目に目覚めたときは昼近くになっている。

親しい編集者にそのことを話すと、「やはり年齢のせいじゃありませんか」と笑われた。

「まだ四十二だけど」

「でも、四十をこえたところからはじまつたんでしよう」

「しかし、早く目覚めるといふのは、それだけ元氣だつて証拠じゃないのかな」

「それは違ひますよ。僕の友人の医師の話では、早く起きるのは、それだけ長く眠り続けるエネルギーがない、要するにスタミナがない、ということになるらしいのです」

「眠るのにも、スタミナがいるのかな」

「体力の弱い人は、浅い眠りを小刻みにくり返すんだそうです。若い人は、一度眠ると顔の上に太陽が照りつけても眠り続けているでしょう」

その話をきいて、風野は少し淋さびしくなった。

だがたしかに、いまも衿子は眉まゆ一つ動かさず眠り続けている。

目を覚ますと、低血圧だ貧血だと、いろいろな症状を訴えるが、これだけ眠れるところをみると、やはり若いのかもしれない。

風野はその寝顔を見て腹立たしくなることもあったが、いまはそんな気はおきない。

それより火事のほうが気になる。何台もの消防車が駆けつけてきているのか、低く長くサイレンが続く。

風野はなおしばらく床のなかでできていたが、衿子の寝ているのをたしかめて起き上った。カーテンで遮さへぎられた部屋のなかはまだ夜のままで、衿子の布団ふとんの先を踏まないようにしてトイレへ行き、戻もどってきてからカーテンの端をあける。

ベランダのガラスは夜露よゆに濡ぬれ、その先にセントポーリアとゼラニウムの鉢植はちうえが二個並んでいる。東の空はすでに白んでいるが、街灯の明りはまだ点ついたままである。

思ったとおり、サイレンはベランダの右手のほうからきこえるが火は見えない。家の方角だが距離的には大分離れているはずである。

風野がそのままベランダに立ってサイレンの鳴る方角を見ると、うしろから衿子の声がした。

「どうしたの……」

られていたかと思うと、あまりいい気はしない。そんなうしろ姿に、家を思う男の風情が出ていたとするとやりきれない。

風野は家を思う気持ちを振り捨てるように煙草をもみ消すと、衿子の肩口へ手を伸した。

六畳の和室には、ベッドの嫌いな風野に合わせて、布団が二つ敷いてある。風野は寝たまの衿子の布団へすべり込んだ。

「おい……」

衿子の布団には女の温もりがある。それをしばらくたしかめてから、抱き寄せようとする
と、衿子はそつと背を向けた。

「いや……」

求めるとき、衿子はきまって、「いや」という。それは拒否というより、羞恥心からくる反射的な言葉のようでもある。風野はかまわず、両手で自分の方を向かせようとしたが、衿子は海老のように体を曲げて硬くしている。

「どうした？」

答えないのでうしろから覗きこむと、衿子は背を向けたまま、目は大きく見開いている。

「いいだろう」

もう一度、肩口から引き寄せようとしたが、衿子は相変らず体を硬くしたまま動かない。こんなとき強引に求めれば、許さないわけでもないだろうが、あまり快いことはない。たと

え男のほうが達したとしても女の反応は薄く、味気なさが残るだけである。

そのあたりのことは、長年の関係で風野は知っている。

それでも以前は強引に求めたこともあったが、いまは比較のおさええいられる。それは優しくなったというより、年齢をとって寛容になったせいかもしれない。

風野は燃えかけた欲望をおさえるように再び煙草に火をつけた。そのまま足は衾子の脛に重ねていた。火事は下火になったのか、サイレンの音はいくらか間遠くなったようである。

突然、衾子は布団を脱けると、ネグリジェの前を合わせて部屋を出ていった。

「新聞がきていたら、持ってきてくれ」

風野がいったが衾子は答えない。そのまま待っていると、衾子は新聞を枕元におき、また出ていった。風野は枕元のスタンドを点け、横向きになって新聞を読みはじめた。

一面に、医療機関の脱税のことがでている。毎年くり返されることだが、一度、その内幕を徹底的に調べてみないかと、ある月刊誌の編集者にいわれていたテーマである。

やりたいと思いながら、すぐとびつくのはおかしいと思って、「考えてみます」とだけ答えておいた。今日か明日あたり、なに気なく電話をしてみよう。そんなことを考えながら、政治、経済面の見出しだけ追って、社会面に目を移す。

読み終えたとき、火事はおさまったのか、サイレンの音は消えていた。

だが、リビング・ルームは静まり返ったまま、衾子は戻ってこない。

「おい」

風野は新聞を持ったまま呼んでみた。リビング・ルームとのあいだは襖ふすまになっているが、呼べばすぐきこえる。

「おい……」

もう一度呼んでみたが、やはり返事はない。トイレにでもいつているのか、あるいはキッチンにでもいるのか。しかしそれにしても長すぎる。

風野は布団から這はい出し、襖を開けてみると、衾すわ子はテーブルの前に坐すわって煙草を喫くっていた。

五年前、風野と知り合ったころ、衾すわ子はほとんど煙草を喫くわなかった。たまに悪戯いたづら半分に喫くつても、うまく煙を吐き出せず、すぐ咽ひせた。それが二、三年前から、少しずつ喫くうようになった。多くは食後かアルコール類を飲むときだが、氣持いらだが苛いた立たつているときにもよく喫くう。いまはその後者に違ちがいなかった。

「寝ないのか」

もう一度声をかけてみたが、衾すわ子は答えない。風野はしばらくそのうしろ姿を見ていたが、やがて起き上り、寢間着ふきげんの上にガウンを着て衾すわ子の横に坐すわった。

「どうしたんだ、急に不機嫌ふきげんになつて」

「別に、なんでもないわ」

衿子は素気なくいうと、自分で淹れたコーヒを飲んだ。

「火事だから、どちらの方角かと見ていただけたらろう」

「違うわ」

衿子が横顔を見せたままいった。

「あなたは外を見ながら、家のことを考えていたのよ。心配していたのはこのことではなく、家のことでしよう」

「俺は、別になにもいっていないじゃないか」

「でもわかるの、あなたのうしろ姿に出ていたわ。帰りたいのなら、帰ってもいいのよ」

「帰らないといたろう」

「無理しなくてもいいわ」

衿子はかすかに笑うような表情をした。二人でいい争い、感情が高ぶったときときどき見せる表情である。

「まったく馬鹿げている。サイレンが鳴ったからといって、俺の家が焼けるわけではないだろう」

「そう、あなたの家は、まわりが広くて緑が多いから、焼けないでしょう」

「どういう意味だ……」

「そういう意味よ」

風野の家は小田急線の生田^{いくた}にある。六年前、会社を退職したときの退職金と水戸にいる母から分けてもらった金で、三十五坪の土地付きの建売りを買った。

いまではまわりにずいぶん家が建ったが、それでも都内からみるといくらか余裕があった。まだローンは残っているが、土地は値上りして、いま売ればかなりの額にはなる。

もちろん、衿子は風野の家に来たことはないから、まわりに空地があり、緑が多いということも彼女の想像である。

衿子の住んでいるところは、小田急線の下北沢で、生田からみるとかなり都心部だが、一DKのマンションである。駅まで五分と便利ではあるが、まわりにはマンションが密集し、陽^ひ当り^{あた}もあまりよくない。

両者を較^{くら}べれば、生田のほうが住み心地がいいにきまっているが、中学生と小学生の女の子が二人いては、そう広いともいえない。

「あまり、変ないい方をするのはよせよ」

風野はこれ以上、争う気はなかった。火事もおさまったようだし、いまさら帰る気にもなれない。

たとえ、これから帰ったところで、家に着けば六時を過ぎてしまう。そのころでは、子供も起き出して、朝帰りしたことは明白である。

「寝ようか」

風野は前よりさらに優しくいつてみたが、衿子は首を左右に振った。

「いやよ」

「まだ、つまらないことにこだわっているのか」

「つまらないことではないわ。わたしにとっては重大なことよ。もしなにか起こったら、あなたはすぐ向こうに駆けつける。あなたにとって大切なのは向こうで、わたしなんかどうなってもいいのよ」

「そんなことはない。もし俺が向こうにいて、こちらの方角で火事でもおきれば、すぐ駆けつけてくる」

「笑わせないで。この前、もし大地震がおきたらどうするってきいたとき、あなたは、『家のまわりは空地が多いから大丈夫』っていったでしょう。それであなたの気持はわかったのよ」

たしかに、風野はそんなふうにいった覚えがある。なに気なくきかれたので、自然に答えただけだが、衿子はそれを根にもっていたらしい。

「あのときは、家にいて地震がきたら、ということだったろう」

「そう、あなたにとって家というのは、あくまで向こうで、ここはただ泊っていくホテルみたいなものなのよ」

「そんなことはない。俺はここに資料や着がえの背広や、下着だって置いている」